

談話におけるくりかえしの構造  
——中国語と日本語の場合——

李 東 傑

要約

## 中・日両語言口語中の重复現象

李 東傑

重复是一種常見的語言現象。

自然語言中的重复可分為意識性重复，非意識性重复，以及介乎二者之間的多種重复情況。非意識性重复雖然使得語言的冗余度提高，廢話增加，但却是自然語言中不可缺少的潤滑劑和緩衝材料。相反，有意識的重复則常々作為修辭手段，表述着發話人的某種言外之意。就重复的具体形式而言，又可分為表層重复，深層重复，發話人重复，聽話人重复等。

本文希望从語用學角度，結合信息理論，对中・日兩語言口語中常見的聽話人意識性重复以及由此產生的涵義作一點分析和說明。

「くりかえし」と言う言葉は辞書の説明では同じ事を二度、または二度以上することである。われわれ人間の行為には考えてみるとくりかえしが実に多い。朝、起きて、晩、寝る。一日に食事を取って仕事をする、というようなサイクルをくりかえしている。

そこで、くりかえしをどう定義したらよいだろうか、辞書のように定義したらよいだろうか、「同じ」というのは何だろうか、物理的に全く同じでないことをわれわれは常に「同じ」という言葉を使ってひっくり返して言う。毎日同じ朝起きて晩寝るにしても必ずしも同じ時間に起きて同じように寝るとはかぎらない。しかも、毎日、食事を取ると言っても多少違うところがある。つまり、人間行為としての反復は常に同じ形式をしていながら実質的に内容が違ってくる。

そして、同じ反復と言ってもわれわれが意識して反復する場合もあれば意識せずに反復する場合もある。

また、どういう行為を意識的に反復し、どのような行為を出来るだけ反復しないかと言うと、それはわれわれの生活や仕事などに必要かどうかによって決められる。

なお、反復がわれわれに必要なかどうかという価値判断は時には人によって違うから、A の人に反復されてもよさそうなものがB の人が反復するとおかしくなることもある。

人間の言語活動も人間行為である以上、人間の行為としての特徴も持っているわけである。つまり、人間の言語活動における反復に影響するものには、まとめてみれば次のようなものがあると思う。

深層的か表層的か	意識的か無意識的か
話し手か聞き手か	新情報か旧情報か

ところで、言語活動はあくまでも言語によって行なわれる人間の行為なので、人間の他の行為と異なったところがあると思われる。では、言語行為における反復はどんな特徴を持つか、その構造はどういう形になっているか、われわれは反復によってどんな意味を表わしているか。そして、われわれは日常の直感から反復に限度があると分かるが、このことはどう説明したらよいか。また、言語行為としての反復は一応共通的な性格を持つもので、いかなる言葉にも見出されると言えるが、中・日本語において、どのように表われているか。次は以上の問題点にしばってくりかえしを見ていきたいと思う。

## I. 深層的くりかえしと表層的くりかえし

次の例(1)と(2)を見てみよう。

(1) A. 「今日のステーキはやわらかくておいしいね。」

(今天的鉄板焼鮮嫩可口，好吃。)

B. 「ほんとうにおいしいね。」

(真是好吃。)

(2) 「田中さんは行きたくなかった。だいたい彼はパーティの類は嫌いだった。」

(田中没想去。一般说来, 他討厭参加宴会。)

例(1)では「おいしいね」とBがAの言葉のままで反復するのに対し, 例(2)は田中を代名詞の「彼」でくりかえしている。

ここでは例(1)のような前の言葉をそのままの形で反復する例を表層的くりかえしと, 例(2)のような元の形ではなくて, 内容を反復するものを深層的くりかえしと呼ぶことにする。内容を反復するような深層的くりかえしは同内容の代用語を使ったものであって, 構文上, どうしても欠かせないものであるから代用語と代用される語の間には意味のずれや変化は許されないのが普通である。しかし, 話し手の特殊的感情が込められるものは場合によっては認められる。例えば「ののしり語」の場合,

(3) A. 「山田さんはうまくやったか?」

(山田干得好吗?)

B<sub>1</sub>. 「いや, あの野郎, うまくやれるもんか。」

(好? 那家伙, 能干好吗?)

「ののしり」ほどの言葉でなくてもこういった話し手の感情の介入が感じられる。

B<sub>2</sub>. 「いや, あいつはうまくやっていたもんか。」

(好? 那家伙能干好吗?)

ここでは中・日反復表現の相異点に注意されたい。日本語の場合は相手の言葉を受けつぐものとして, よく「はい」, 「いいえ」, など使うが, 中国語の場合は直接に疑問文の形で文の肝心なところを反復して, そして, その反復によって強く打消の意を表わすのである。

代名詞のほかに同じ意味, あるいは類似した他の表現で言いかえす深層的反復も見られる。

(4) 于是, 我挥手告别, 攀上山峰。登上山顶, 非常容易。

(それで, 私は手を振って別れを告げ, 頂上に登ることにした。登るのは全く楽だった。)

ここでは「攀」と「登」はほとんど同じ意味で使われているが日本語ではどちらも「登る」にしかない。

その他, 前の文脈に出た物ごとを意味的に包摂するような代用表現でくりかえすことがある。

(5) 鈴木さんは「ハムレット」を見に行った。この悲劇に彼はいたく感動した。

(鈴木去看了《哈姆雷特》。这出悲剧, 深深感动了他。)

この場合, 言語外の知識によって反復された部分が同じものを指すことは聞き手に分かる。すなわち, 意味範囲の広い語を用いて先行文脈に出たものごとをくりかえしているのである。

深層的くりかえしは旧情報の反復が多い。それは全く同じ言葉を使うことによって生じた冗長さを避けるために同内容の言葉を選んだ結果である。本稿ではこれから主に表層的反復について説明することにする。

## Ⅱ. 意識的くりかえしと無意識的くりかえし

われわれは日常的に使われている言葉の反復には意識的なものもあれば無意識的なものもあると前に言った。例えば、次の例では反復されたのは口癖のようなもので、無意識的なものである。

(6) 「そうですね、だいぶ、この、なんですね、年賀状だけじゃないですね、その、あいさつ状ですね、そういうものが増えていくように見えますね。」

中国語にも同じようなものが見られる。

(7) 「怎么说呢? 反正、十点鐘、反正現在也集合不起来、反正……。」

無意識的反復は話し言葉に比較的が多い。日本語で本を朗読していると間違ったところや急に続かないところを「ええ」という発音でその間を埋めるようにするのも一種の無意識的反復になる。中国語の場合も同じようにその間を埋めるが、ただ「嗯」という発音で「ええ」の発音ではないような違いだけである。

意識的に反復する例は、例えば、人に聞かれたりすると確認のため、一度復唱する、復唱しながら答えを考える場合

(9) A. 「先週の土曜日の午後、何をしていた?」

(上星期六下午，你干什么了?)

B. 「先週の土曜日の午後、何をしていたって?」

(上星期六下午，我干什么了呢?)

中国語の場合、こうした時に、ひとりごとのように終助詞「呢」を使うのはよくある。

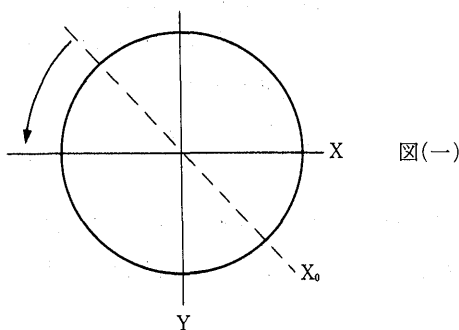
しかし、次のように意識的か無意識的かのどちらに入れたらよいかと迷う時もある。

(10) 「彼は映画がすきで、とても、とてもいい脚本を書いている。」

(他喜欢电影，写了些非常，非常不错的脚本。)

例(10)は意識的な反復として使われるほうが多いように思われるが無意識的にも使えそうである。

こういうわけで、反復の中には意識的な反復から無意識的な反復まで、さまざまな意識度の反復があると考えられる。次の図のようにまとめてよいと思う。



図(一)

Xを話し手の意識的くりかえしと、X<sub>0</sub>を無意識的くりかえしとそれぞれ表わすとするXからX<sub>0</sub>の間はいろいろな意識度を表わすようになる。そして、

X<sub>0</sub>→X：無意識的反復から意識的反復へと変わっていく。

X<sub>0</sub>＝X：無意識的反復と意識的反復のはっきり区別のつかないもの。

X→X<sub>0</sub>：意識的反復から無意識的反復へと変わっていく。

極端なX<sub>0</sub>はどもりの反復と精神病患者のくりかえしを上げることができる。自然な無意識的くりかえしは書き言葉に直せばすぐ抹消される。しかし、実は例(6)のような無意識的反復こそ話し言葉を生き生きとさせるもので、自然な日常会話の中では冗長度を上げるにもかかわらず、その一方、このような自然な無意識的反復をなくしては話し言葉の間がなくなり、会話がどうしても不自然になってしまうのである。それは日本語にしても中国語にしても同じだと言える。

意識的か無意識的かと言うことはそう簡単に区別できないものであるばかりでなく、一定の条件において、お互いに変わっていくこともある。母国語の人には自然な無意識的反復も、外国の学習者にはかなりの段階において意識的にくりかえしをしなければ、無意識的に自然にくりかえすようになれない。

本稿はこれから意識的くりかえしについて調べていくようにするから無意識的くりかえしについてはこれ以上深く触れないようにする。

### Ⅲ. 話し手反復と聞き手反復

談話における反復は常に聞き手が話し手の発した言葉に対して何かの要素を全部、あるいは部分的にくりかえすという形を取っている。しかし、時には、例えば文章を書く時などの意識的反復は相手と直接に面しているのではなくて、ひとりごとのようにくりかえす場合もある。ここで、前のような反復を仮に聞き手反復と後の反復を話し手反復と呼ぶことにする。話し手反復としてよく見られるのは次のようないわゆる「あなあけ」<sup>1)</sup>の例である。

(11) 山田さんはコーヒーを、田中さんはジュースを（それぞれ）飲んだ。

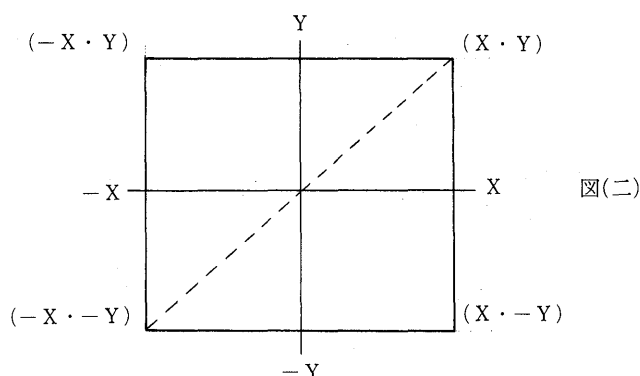
（山田、田中分別喝了咖啡和果汁。）

このような場合に中・日文とも「それぞれ」とか「分別」のような言葉を使うのである。そして、中・日文とも同じように、話し手あるいは、書き手は一組の何かの自然なセットになれるもの、（ここではコーヒーとジュース）をあらかじめ認識、想定しなければならない。このようなセットは旧情報として書き言葉で使われることが多く、会話の中にはわりに少ない。もし、このような文を会話の場合で発したら何かはじめてから答を用意していたようであるから不自然になることが多い。

その他、先に言った深層的反復も話し手が同一の言葉を避ける修辞法として同じ意味、あるいは似た意味の言葉を選んだため、その多くの場合は話し手反復になる。

#### IV. 談話におけるくりかえしの構造

以上でくりかえしを表層的と深層的、意識的と無意識的、そして話し手と聞き手の三つのパターンに分けてみた。これから、談話におけるくりかえしについてインフォメーションの立場からその構造を説明し、その実態を調べることにする。談話における反復は常に聞き手の意識的かつ表層的反復の形になっているからここで次のような図を描いて考えることにする。Xを話し手の認識としての新情報と、Yを聞き手の認識の新情報とすれば、そのそれぞれの反対側に $-X$ を話し手の認識的旧情報と、 $-Y$ を聞き手の認識的旧情報とすることができる。図は次のようになる。



機能論から言えば反復をより新しい要素からより古い要素へと順に行なうのは原則である<sup>2)</sup>。ここで、X, Yを情報の一番新しい、しかも重要度の一番高い点と、 $-X$ ,  $-Y$ を逆に情報の一番古い、しかも重要度の一番低い点とすると、話し手にも聞き手にも新しくかつ重要度の最大の(X, Y)点ではまず反復すると考えられる。そこで、くりかえしをKで表わすのならば、つまり

K (X, Y)

となる。一方、 $(-X, -Y)$ は省略(S)される可能性が大きいから、

S  $(-X, -Y)$

とする。 $(-X, -Y)$ から(X, Y)へと行けば行くほど反復の可能性も増え、(X, Y)から $(-X, -Y)$ への場合は逆に省略されるケースが多くなる。

ここでは問題になるのは話し手がXとするものを聞き手が $-Y$ とする、あるいは話し手が $-X$ とするものを聞き手がYとするのならばどうということが起こるかということである。

前者は例えば次の例のように話し手の新情報に直接に答えない場合などに起きる一種のぴんぼけである。

(12) A. 「あなたは1965年にもう日本に来ていましたか?」

(1965年, 你已經在日本了嗎?)

B. 「はい, 私はいました。」

(我在。)

後者の場合は話し手が新情報としていないものを聞き手が勝手に強調して反復するのならば、まず、くどくどしく感じられるであろう。くわしいことはあとで、もう少し触れたい。

原則的には図2のようだと言えるが、実際はいろいろ会話のルールの違反もあってわざと普段と違った会話のやりとりをする場合もあるから、かなり複雑なようである。

### 1. (X, Y) によるくりかえし

話し手が提供された新情報に対し、聞き手が感動したり、確認したり、驚いたり、喜んだりすることがよくある。そして、それらの反応は、聞き手みずからの言葉のくりかえしによって表出されることが多い。

(13) A. 「野田さんはすりをしたことがありますか?」

(野田你有没有作過小偷?)

B. 「私がすりをしたことがあるかって?」

(我有没有作過小偷?)

A. 「ええ、その通りです。」

(正是。)

B. 「私がすりをしたことがあるかって? とんでもない。」

(我有没有作過小偷? 豈有此理。)

一度目の反復はBの驚きと確認を、二度目の反復は再確認をそれぞれ表わしている。話し手の新情報に対し、聞き手も新情報として受け止め、それでびっくりし、かつ確認の気持ちになったわけである。この場合に話し手の新情報が聞き手にマイナスかプラスかによって聞き手の反応が違ってくるし、反復によって表わされる意味も違う。

(14) A. 「これをあなたにさしあげます。」

(这个送给你)

B. 「私に?」

(給我?)

例(14)は聞き手にはプラスなのでただの驚きだけではなく、驚きよりその一瞬の喜びを表わしているであろう。例(13)は少し違う。「すりをしたことがあるか」と聞かれてマイナスのことであるから「驚き」とともに話し手に対する「反撃」の意味あいも含められている。

相手を驚かそうとする文は例えば次のような場合、

(15) A. 「昨日、新車を買ったんだ。」

(昨天, 我買了一輪新汽車。)

B. 「えっ新車を買ったって?」

(啊, 買了一輪新汽車?)

聞き手がよく自分の言語コンテキストにおいて相手の出した情報を判断して応答するのである。例えば、「車を買う」ことは日本では可能なことで、驚くのは「新しい車を買った」という



ことである。それに対して中国では今、まだ考えられないことなのでこの場合に「驚き」より「うそつけ」と言おうとする気持ちがつよい。

(16) A. 昨天，我買了一架飛機。

(昨日，飛行機を買ったんだ。)

B. 胡說八道 (うそつけ)

と同じことである。つまり、聞き手は話し手によって提供された情報が普通の言語常識にはずれたと判断しているのならば、反復という形ではなくて評価を下すこともある。逆に話し手によって出された情報があまりにも平凡すぎて、ありふれたものだったら、新情報として認められず、くりかえさずにその次に説明を求めたりすることがある。

(17) A. 「昨天，我買了一个面包。」

(昨日，パンを一つ買ったんだ。)

B. 「怎么了？」

(それで?)

## 2. (-X, -Y) によるくりかえし

まず、反復の不可能な文から見てみよう。

(18) A. 「要るのなら自転車を買ってあげるよ。」

(如果需要，我給你買輪自行車。)

※ B. 「要るのなら，自転車を買ってくれる？」

(如果需要，你給我買輪自行車?)

Bの答は不適当だということはあきらかである。Bが自転車を欲しがめることはB自身にはもう新しい情報ではない。AはこのBの様子などを見ているからこそ、こう仮定するのである。したがってBが反復するなら、文の主節の新情報を荷う部分だけを反復すればよいわけである。このような復文の場合、普通、条件節で旧情報を表わすので反復しない。

(19) A. 「昨日の晩，飲みすぎたので今朝は二日酔いだ。」

※ B. 「昨日の晩，飲みすぎたので今朝は二日酔い？」

分裂文では「～は～だ」の「は」の前の部分（「……的是……」「的是」の前の部分）は旧情報を含む部分なので反復できない。

(20) A. 「このきれいな部屋を建てたのは田中建設ですか？」

(修建这座漂亮的房子的，是田中建筑公司吗?)

※ B. 「いいえ，このきれいな部屋を建てたのは田中建設ではありません。」

(不，修建这座漂亮房子的，不是田中建筑公司。)

Bのような答え方は自然な日常会話では少ないと言えよう。しいて反復すると確かめながら答えていくような感じが出る。むしろ、「いいえ，そうではありません」のほうがよく使われる。

相手の発話が会話の切り出しなどの常套句になる場合、例えば次の場合、

(21) A. 「あのね。」 (喂)

※ B<sub>1</sub>. 「あのね」(喂)

B<sub>2</sub>. 「何?」 (干什么)

B<sub>1</sub>のような反復はまともな会話では許されない。常套句は最も古い情報に属し、そのような表現の中から新情報を取り出すことは不可能だからである。

つまり、話し手も聞き手も新情報と思わないものは反復しないのが普通の会話の実態である。ところが実際には旧情報でも省略しないで反復することも見られる。そういう場合はたいして話し手が意識的に反復するのであって言外の意味を伴うのは言うまでもない。例えば、常套句と似ている挨拶言葉を見てみると「いいお天気ですね」と言っても、ほんとうに天気予報のような天気に関する新しいインフォメーションを伝えるつもりはないにもかかわらず、われわれはほぼ毎日のごく自然に次のようなやりとりをしている。

(22) A. 「いいお天気ですね。」

B. 「そうですね, いいお天気ですね。」

これは常に共感を求めるために反復するのである。

話し手も聞き手も(−X, −Y)を(X, Y)として反復しなければならない状況におかれた時に、一種の儀式としての決心、決意、共同動作の要求などのニュアンスが表わされる。大勢の人で重いもののかついで歩くときに声を出し合いながら歩いていく時の言葉を思い出す。

(23) 「わっしょい, わっしょい。」

(哼唷, 嗨唷。)

特に昔の軍隊ではよく士官が自分の無意味の言葉を下士官に反復させる。こういう時は確認、服従、ないし、敬服させるような意味あいが含まれているという。<sup>3)</sup>

### 3. (X, −Y) と (−X, Y) の場合

話し手が新情報を得ようとして発した言葉に対して聞き手が新情報を与えずに反復するのならびんぼけになると前に少し触れた。

(24) A. 「田中さんは今何を習っていますか。」

(田中現在在学习什么?)

※ B. 「はい, 習っています。」

(是, 在学习。)

(24)のAに対してBの答は相手にとって肝心な新情報に答えなかったから当然不適当になる。逆に一定のコンテクストにおいて話し手の旧情報まで聞き手がくりかえすこともある。

(25) A. 「昨日, 三時ごろ家にいましたか?」

(昨天, 三点鐘你在家吗?)

B. 「はい, 昨日の三時ごろ家にいました。」

(在, 昨天三点鐘, 我在家里。)

Bの答は普段、くどくどしく思われる。自然な会話では「はい, いました」でよいわけである。しかし、次のような場合なら、Bの答がよいとされる。例えば外国語を習う時に先生のあと

についてくりかえして言葉の発音の練習をする場合、この場合は言葉の表層の習得が第一なので、一番古い情報でも反復される。それから、例(25)は第二人称でなく第三人称にして、他人の行為について話す場合なら反復してもよさそうである。

(26) A. 「山田さんは昨日、三時ごろ家にいましたか？」

B<sub>1</sub>. 「山田さんは昨日、三時ごろ家にいました。」

B<sub>2</sub>. 「はい、いました。」

B<sub>1</sub>のほうが不適当とされるかもしれないが実際にはよくあるもので、例えば次のように言うともうおかしくも何とも感じなくなる。

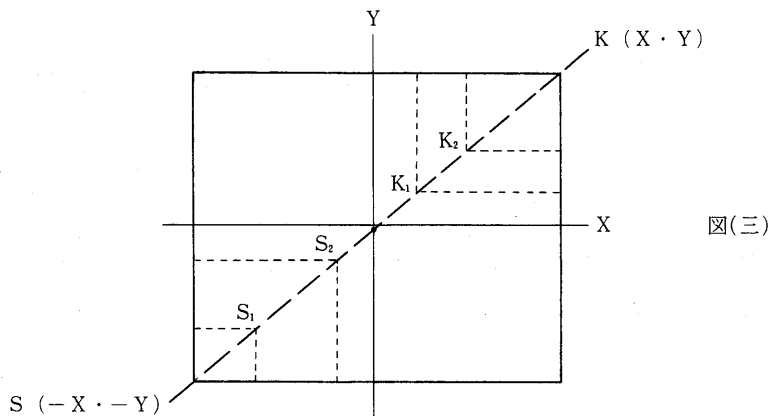
(27) 「山田さんですか、山田さんは昨日、三時ごろ家にいました。」

しかも、B<sub>2</sub>より、B<sub>1</sub>のほうが丁寧に聞こえる。

また、丁寧に答えたほうがよい場合にももちろん、B<sub>1</sub>のほうがよい。例えばアリバイなどを聞かれたときは、念のために、確実にと言った感じで始めからくりかえして答えたほうがかえてよい。

#### 4. $(-X, -Y)$ から $(X, Y)$ へ

くりかえしはよくあると言ってもオウムのように同じ声で何回も何回もくりかえすわけにはいかない。人間は意識の持ち主で、必要な情報しか受け入れない。ここで反復の度数について考えてみたい。次の図を参考にしたい。



前に触れたように新しい情報が入っていないかぎり、反復はしないのが普通の形である。しいて、反復させようとするると他の意味が生じてくる。電車のアナウンサーの場合、

(28) 「西宮北口、西宮北口でございます。」

中国語でも同じように

(29) 「北京站、北京站到了。」

二回ぐらい反復してよいわけである。話し手にも聞き手にも、もう、これ以上の新情報が入っていないから、二回以上の反復は不適当になる。

「西宮北口、西宮北口、西宮北口」と三回反復されると何かあって重々しく聞こえる。

三回以上くりかえされるとアナウンサーがおかしいか放送設備の故障かと思われるであろう。

ただし、反復中にまた状況の変化とか聞き手の変化とかがあると想定できる場合、新情報が入ってくる時だったら一定の時間をへての反復は数回も考えられる。地震や重大な事件が起きた場合にアナウンサーが数分間おきに同じ内容のことをくりかえして放送することがよくある。

新しい情報が少なければ少ないほど反復の可能性も少なくなる。言い換えれば省略の可能性が増えていく。教師は講義中に同じ事ばかり反復して言ったりすると笑われることさえある。むしろ、「今日のポイントは……」と必要なところを反復するほうがかえって喜ばれる。中国語の場合も例えば学生の誰かがいねむりをして気がつかなかったりしたら、教師は「請注意……」と気づかせるまで何回も反復する。もちろん、こういう場合に反復の度数につれ、教師のいかりやじれったさが高まってくるのである。まとめて見れば次のようになる。

S→K 反復の可能性が増えてくる。

S→K<sub>i</sub> 省略の可能性が減っていく。

K→S 省略の可能性が増えてくる。

K→K<sub>i</sub> 反復の可能性が減っていく。

そして、話し中に、K<sub>1</sub>、K<sub>2</sub>のような新情報が多ければ多いほどくりかえしの回数も多くなる。

以上で日本語と中国語のくりかえし、主に言葉レベルのくりかえしを見て来た。そして、くりかえしを便宜上三つのパターンに分けてそのそれぞれの実態と言外の意味について簡単に説明をした。また、聞き手による意識的かつ表層的くりかえしについて機能論的立場から説明を加えたのである。

実際は言葉のくりかえしのほかに、例えば中・日両言語のスタイルのくりかえし、文法的くりかえし、ないしくりかえしと文化とのつながりなど興味を引くところも多いが本稿では触れないことにした。これらはこれからの面白いテーマになるのではないかと思う。

#### 参考文献

1. 久野暉「談話の文法」大修館書店 1978
2. 安井稔「言外の意味」研究社出版 1978
3. オースティン著、坂本百大訳「言語と行為」 1978
4. 牧野成一「くりかえしの文法」大修館書店 1980
5. 河上誓作 アイロニーの構造、「大阪大学文学部紀要」第二十四号 1984
6. 福地肇「談話の構造」大修館書店 1985
7. サール著、坂本百大訳「言語行為」 1986

注

- 1) あなあけについては久野暉「談話の文法」(p 57), 牧野成一「くりかえしの文法」(p 56) 参照。
- 2) 牧野成一「くりかえしの文法」(p 39) 参照。
- 3) 牧野成一「くりかえしの文法」参照。

(原稿受理 1988年9月8日)